

第 38 回日本ジオパーク委員会議事録

日時：2019 年 12 月 25 日（水）13：00～16：38

場所：砂防会館別館 B 3 階「霧島」

<委員長>

中田 節也 東京大学名誉教授・防災科学技術研究所火山研究推進センター長

<副委員長>

黒田 乃生 筑波大学芸術系教授

<委員>五十音順

池田高世偉 隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会会長・隠岐の島町長

大野 希一 島原半島ジオパーク協議会事務局次長

久保 純子 早稲田大学教育学部教授

欠席 齋藤 文紀 島根大学研究・学術情報機構エスチュアリー研究センター長・教授

佃 栄吉 産業技術総合研究所特別顧問

欠席 矢ヶ崎紀子 東京女子大学現代教養学部教授

渡辺 綱男 自然環境研究センター上級研究員

渡辺 真人 産業技術総合研究所地質情報研究部門・ユネスコ世界ジオパークカウンシル委員

<調査運営部会長>

宮原 育子 宮城大学名誉教授・宮城学院女子大学現代ビジネス学部教授

<日本ユネスコ国内委員会>

秦 絵里 文部科学省国際統括官付国際統括官補佐

松永 愛 文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係

<関係省庁（オブザーバー）> 建制順

中山 隆治 内閣府 地方創生推進室 参事官

柴田 伊廣 文化庁 文化財第二課 文部科学技官

溝田 直己 文化庁 文化資源活用課

黒田 俊久 経済産業省 産業技術環境局 知的基盤推進官

今西千妃路 観光庁 観光地域振興部 観光資源課 新コンテンツ開発推進室 主査

井 智史 気象庁 地震火山部 火山課 火山防災情報調整室 噴火予知調整係

荻野 周 環境省 自然環境局 国立公園課 国立公園利用推進室 エコツーリズム推進専門官

<事務局>

齊藤 清一 JGN 事務局長

古澤 加奈 JGN 事務局次長

野邊 一寛 JGN 事務局次長

佐々木 泰 JGN 事務局員

水野恵美子 JGN 事務局員

畑中 真澄 JGN 事務局員

山崎由貴子 JGN 事務局員

<開会・委員長挨拶>

事務局：ただいまから第38回日本ジオパーク委員会を開会する。始めに委員長よりご挨拶をお願いしたい。

委員長：年末の忙しい時期に出席いただきありがとうございます。ジオパークに関する最近の話題を報告する。

まず、ユネスコ世界ジオパーク事業にIOS（インターナショナルオーバーサイトサービス）という、ユネスコの内部機関による内部監査が実施された。ユネスコ世界ジオパークカOUNシル、GGN 執行部、各国のジオパーク委員会や国内委員会、いくつかの国際会議やジオパークに出向いて調査が行われた。まだ最終版の報告ではないが、全体的には良い評価だった。政治的圧力がなく専門家が先導している優れたプログラムとの評価。しかしながら、体制や仕組みについて指摘があった。ジオパークプログラムはIGGP という、IGCP とユネスコ世界ジオパークが一体化して一つのプログラムを作っているが、それぞれ独立しており連携があまりなされていない。ジオパークの認定基準が明確ではなく、認定されなかった地域や国からクレームが入る可能性があるので明確にしてほしい。現地審査員の選考過程が不透明であり、どのような専門家でも入ることができるようにすべき。現地審査から審査結果公表まで時間を要し過ぎている。ジオパークカOUNシルやビューロー、GGN 個人会員は現地審査員になるべきではない。ユネスコの様々なプログラムを活用してジオパークを世界に広めるようにしてほしいとの指摘があった。1月中旬までに意見を上げて、意見が反映された形で最終報告が出される予定。また、世界ジオパークネットワークの中にユースフォーラムが立ち上げられることになった。来年9月に済州で開催される国際会議にあわせて第1回ユースフォーラムが開催される。これは若手の意見を取り入れてジオパークの将来構想や戦略を組み立てることを目的としている。ユースの定義だが、国連の場合は18歳から24歳までを指す。各国から1名派遣することとなっており、日本からも1名以上推薦する必要がある。JGCとして誰か推薦するようになりたい。このように様々な動きがあるが、ユネスコ内部監査のコメントの中では、ジオパーク事務局と国内委員会が密接に連携を取りながら取り組んでほしいというものもあった。また、本日は9地域の審査があるが、考え方として、国内ジオパークはユネスコ世界ジオパークを目指す地域が集まっており、審査はユネスコ世界ジオパーク候補を決めるための土壌づくりであるとの認識である。活発な議論をお願いしたい。

<報告事項>

事務局：報告事項が四点。一点目は、11月に大分県で開催された日本ジオパーク全国大会において、来年度以降に日本、世界への申請を目指す地域を対象とした事前相談会を開催した。世界への説明会には6地域が参加。そのうち、白山手取川は来年の申請を検討している。日本の説明会には7地域が参加しており、土佐清水は来年申請する意向を表明。飛騨山脈、十勝岳、上川中部は来年の申請を検討中。茨城県北、三好、五島列島は再来年申請予定と報告があった。二点目だが、同じく全国大会で全地域事務局長会議を開催した。先ほど中田委員長が言及したが、日本のジオパークは、ユネスコ世界ジオパークを目指して活動していることの確認をした。全てのジオパークが、ユネスコ世界ジオパークのガイドラインを基に活動しているとの再確認が取れた。三点目として、本委員会は日本ユネスコ国内委員会の委託を受けて開催している。日本ユネスコ国内委員会からは、日本ジオパーク委員会は認定審査をするだけでなく、積極的に各地域の育成や世界との連携に取り組んでほしいと言われている。来年度以降はその点を意識した事業を推進していきたい。具体的にはまだ事務局案ではあるが、研修や各地域への支援などをJGNの事業から切り離して、日本ジオパーク委員会の主催で実施していきたい。四点目は天草ジオパークの動向について。11月11日に天草が協議会の総会を開催し、来年3月31日を以て解散することを正式に決定した。これまでの経過を報告すると、昨年1月18日の第36回日本ジオパーク委員会で天草は条件付き再認定となり、5月20日の協議会総会において、再審査結果を受けて解散する方針であることを確認している。この時点では解散について公表されていない。5月26日、天草の事務局からJGN事務局に対して、解散する意向であることを内々に報告された。8月22日には天草ジオパーク推進協議会の会長である天草市長にJGNとして面談を行った。天草ジオパークは2市1町で構成されているが、広域行政のあり方に問題があると認識されているように感じた。

条件付き再認定になったことがきっかけではあるが、今後の広域行政の見直しについても考えがあるようなことを発言されていた。

委員長：ただいまの報告について質問等はないか。

委員：天草の件について、広域行政の連携に問題があるとの認識は分かったが、日本ジオパーク委員会としては今後どのような対応をしていくのか。

事務局：一部メディアの報道では「認定返上」という言葉が使われているが、返上ではなく JGN からの退会である。今後、正式な退会届けが提出されてから話しが進むと認識している。メディアの報道や内々の報告はあるが、正式な通知はまだされていない。

委員：ジオパーク活動を行うかどうかは地域の判断ということは認識している。正式な通知が届くまでは対応しないということで良いか。

事務局：5月26日に内々の報告を受けた後、話し合いは行ってきた。条件付き再認定となったから退会するのではなく、自分達がどうしていきたいかを話し合っていくことが大切ではないか、また、JGC に対しても異議を申し立てることも可能との話しもしてきた。JGN、JGC としても支援していくことも説明してきたが、その上で退会するという結論をされた。

<議題①再認定審査地域 JGC 調査運営部会報告・審査>

部会長：調査運営部会より提出された資料を用いて、9件の評価結果を報告させていただく。

副部会長：まず、今回調査運営部会で行った評価の主な判断基準について報告する。今回、厳しい評価結果となった地域があるが、主に3つの要因がある。1つ目はジオパークというプログラムの理念についてあまり理解されていない場合。2つ目は前回の審査で指摘された事項について、ほとんど改善が見られないものが複数ある場合。3つ目は運営体制が不十分である場合、例えば事務局のマンパワー不足や専門員の不在など、今後の展開が不透明な場合。この3つの要因が厳しい評価となった主な理由。逆にこの3つができており、さらに地域の活動が進んでいけば、評価の結果が高くなるのが現在の傾向。このような観点で報告を聞いていただければと思う。

<議題①-1 再認定審査地域 JGC 調査運営部会報告・審査【秩父】>

副部会長：秩父は地質学発祥の地と呼ばれる場所で、河川の侵食で形成された景観や華嚴の滝、秩父歴史文化伝承館等、歴史的な価値もある場所。このような特長を持つ場所で意見交換や、実際に現場で露頭や看板等の視察を行ってきた。評価結果としては条件付き再認定。観光客向けの体制が整備され、今後の展開が見込まれる点等が評価されたが、サイトの保全に関する点あまり明確ではなかった。例えば化石を掘らせて子ども達に配っている。また、地域内において、ジオパークプログラムがどういったものか、あまり理解されていない状態。端的なものとしては、ジオパークにおけるサイトの設定が学術的なものではなく、恣意的なものと思われるような設定の仕方をしている。さらには専門のスタッフがいないため、研究者の学術成果が地域に還元していかない状態になっている。また、前回の指摘事項の中では運営体制の見直し、天然記念物指定に伴う保全計画の策定等が指摘されていたが、対応されていない。これらの点を2年かけて、体制づくりやジオパークのさらなる理解促進を図っていただきたいと考えることから、条件付き再認定と評価した。

委員長：ただいまの報告について審議を行いたい。質問や意見はあるか。

委員：前回の指摘事項に保全計画の策定があるが、前進した部分はあるか。

副部会長：仮にサイトの保全等が進んでいけば、化石を採掘して配ることはされてない。地域で行われている活動はあるが、リンクしていないのは大きな問題だと思う。

委員：改善を求める点に保全・活用方針の明確化とあるが、天然記念物や国立公園、自然公園等、様々な仕組みがある中で、どのような方向性で目指していくのが望ましいか。

委員長：まずサイトが固定化されていない。現地審査の度にサイトが変わっている。固定化されていないという

ことは、保全計画がないということ。この点からもジオパークの理念を理解していないということが分かる。

副会長：おそらく、観光客を増やすことがジオパーク活動の目的という認識が強い。地域資源を守り次の世代に伝えていくという概念があまりないのでは。それをやろうとしている学術研究者はいるが、リンクさせるような運営体制ができていない。もっと地域全体で関わる課題として捉えていくべきだが、その視点までではない。この一つの原因として、ジオパークはネットワークプログラムなので、プログラム自体が変わっていくもの。基準や新しい視点が入ってくるので、自分たちの地域に取り入れて定着させていくためにはキーパーソンが必要であるが、秩父にはいない状況。ジオパークが変わっていく中で変化についてこれておらず、旧態依然のまま。これらの点が今回の評価につながった。

委員：学術的視点で関わりたい人がいても、事務局がうまく間に入って一般の人に伝えることができていないということか。

副会長：地域で何らかの活動をしている人はいるが、自分達がジオパークに関わっていることをうまく理解できていない様子。おそらく事務局がうまくキャッチアップできていないため。

委員：教育プログラムにジオパークをどのように組み込んでいくかは各地域苦労しているところだと思うが、これを含めて、ジオパークの理念を理解していないのは重い課題。2年で解決するためには、サポートしていかねば厳しいのでは。

副会長：教育事業は地域でされているとの報告はあるが、ジオパークをどのように伝えているかは非常に不安。例えば典型的なジオロジーの話だけを教えているとすると、偏った情報が地域に発信され続けていることになる。サポートしていく必要はあると感じる。

委員：報告書に様々な課題が書いてあるが、全てを2年で解決するのは無理なので、優先順位を明確にしてほしい。

委員：県立の立派な博物館があり、地質に重点を置いているかと思うが、連携できていないのか。

副会長：県立博物館の学芸員はジオパークにも関わっている。サイトの認定等も県の学芸員が積極的に評価、チェックをしてくれている。ただ、そういった活動と事務局があまり連携できていないのが課題。学芸員もジオパークの会議に参加いただけると助かるが、ほとんどお会いしたことがなく、昔のジオパークのままになっている。

オブザーバー：天然記念物指定で誤解がある。天然記念物指定がなされてから、指定地内で取られた化石の配布はしていない。指定地外で取られているかもしれないが、そこは分からない。天然記念物指定地内の保全計画は、今年度中に完成する予定になっている。今回議論されているのは、指定地外の場所だと思うので、切り分けて議論いただきたい。

委員長：改善すべき点に保全・活用方針の明確化とあるが、もう少し明確に記載するようにしたい。また、2年以内に行っていただきたい点に集約して報告書を作成したい。これらの点を考慮した上で、条件付き再認定としてよろしいか。

各委員：異議なし。

<議題①-2 再認定審査地域 JGC 調査運営部会報告・審査【三島村・鬼界カルデラ】>

副会長：鹿児島県の南にある3つの島からなる地域。硫黄島の中には、三島開発総合センターという拠点があり、海底地形や地下にある鬼界カルデラの様子を見ることができる。3つの島はそれぞれ特徴があり、黒島では7,300万年前の巨大噴火の火砕流が来ていないので、巨大噴火の影響を受けていない独特の自然が残っている。評価結果としては条件付き再認定。3つの島はそれぞれ個性があるので、それに応じてジオ科という教育プログラムが始まったほか、大学の先生等が多く来訪しており地域研究は進んでいる。また、島の竹や焼酎をブランド化しようとする若い人達が活動をしているが、これらを取りまとめるような計画がない。あるにはあるが、現場の活動とリンクしていない。良い取り組みがバラバラに行われている状態。サイトの魅力を可視化することもあまりできていない。素晴らしい景観があるので、可視化せずとも良いとの

意見もあった。協議会体制を見直した方が良いとの意見もあった。役場が鹿児島市内にあるため、運営母体である行政と島民との乖離が著しいという現状がある。部会等を作って、地域を巻き込んだ運営を行っていただきたい。認定時の指摘事項である組織の実質的な活動とジオパーク整備に向けた計画を策定したり、活火山のすぐ近くに島民が住んでいるにもかかわらず、防災情報の発信がない状況。このことから条件付き再認定とし、我々も支援しながら、活動をより活性化させようという判断に至った。

委員：現地審査に行ってきたが、素晴らしい島だった。ただ、審査員である我々が行けば案内してもらってサイトにたどり着けるが、一般の方が案内もなく行けば公共交通も看板もないのでたどり着けない。情報発信もパンフレット等で行っているが、見どころの紹介はあっても行きづらい場所だとは伝わって来ない。どんな客を呼ぶのか、また、その客にふさわしい案内の仕方をする必要がある。前回の指摘事項で基本計画の策定があり、一応策定されてはいるが、三島ではなくてもどこの地域でも良いような計画であった。三島は特別な島なので、三島ならではの具体的な計画、アクションプランを策定する必要がある。また、現在噴火レベル2だが、どこにも表示がなかった。色々問題があったが、それは体制と計画が不十分であるため。条件付き再認定とし、今後サポートしていきべきだという結論に至った。

委員長：質問、意見等ないか。

委員：指摘事項にマーケティング等の現状分析があるが、それなりの知識やポテンシャル、人材を確保したような形で策定しなければ。いきなりたくさん来ても受入体制に困るだろう。安全面の対策も整備が必要なので、作り込みが必要。うまくいけば、入ってくる人数を制限して、特別感のあるツアー等ができる面白い場所だと思う。1年以内に現状分析が完了できる素地はあるのか。

副会長：元専門員が島に移り住んでいる。そこで地域の人を巻き込んだ活動をしている。そういった人材はいるので、旅行会社と連携すれば面白いツアーを作ることも可能。

委員：最初に書いた指摘事項には、1年以内に着手ないし解決すれば良いと記載していたが、着手の部分が抜けているので元に戻してほしい。

副会長：マーケティングについて、チャーター便で来られた場合は分からないが、少なくとも村営のフェリーしかアクセスする方法がないので客の属性は比較的入手しやすい。これを活用すれば、客のニーズに合わせたツアー造成や情報発信は可能。

委員：入島人数はフェリーの乗船人数で分かる。ただ、有名な露天風呂はあるが、誰も知らない。

委員：宿泊施設やキャンプ場などは整備されているのか。

委員：鹿児島市がキャンプ場を整備した。ここは元々専門員だった方が案内している。宿泊施設の方に聞くと、観光客より公共事業などで工事に来た人を泊めた方が良くと本音は思っている。現在はビジネス用の宿で問題がない研究者等が来ている。基本計画にツーリズムを拡大すると記載し、多くの観光客が訪れたとして、快適に宿泊できるとは限らない現状。若手でゲストハウスを始めようとしている人もいる。観光客をどこに泊めるかから考えないといけない。

委員：確認だが、ジオパークで求められる計画とは基本計画があって、その中にアクションプラン、さらに具体的に、例えばサイトの保全となると保全計画が必要といった考え方で良いか。また、三島村・鬼界カルデラは各種計画についてどのような状況か。

委員：考え方は合っている。基本計画はあるが、具体的な内容までは策定されていない。小さな村なのでスタッフが足りないのは理解しているが、計画から立てないと進められない。

副委員長：素晴らしい地域なのでサポートしていきたいとの発言があったが、具体的な支援内容は何か。

委員：先方から要望があれば、審査結果報告書の内容の説明や、現地で基本計画を立てる打合せの際に同席する等のサポートをしていきたい。

副委員長：秩父の場合はサポートの話しが挙がらなかったが、全ての地域をサポートするのか。

委員：全ての地域とも要望があれば行きたい、ただ、審査員はほぼボランティアのため、全員ができる訳ではない。また、地域の意向も鑑みて決定する。

委員長：三島村・鬼界カルデラは条件付きにするということによろしいか。

各委員：異議なし。

<議題①-3 再認定審査地域 JGC 調査運営部会報告・審査【佐渡】>

部会長：火山活動による熱水で形成された金銀鉱床や、日本海の拡大とその後の大地の隆起現象を記録する貴重な地質遺産を有している。地形が多様性に富んでおり、大佐渡山地、小佐渡山地と、山地から供給された堆積平野や金北山等の様々な自然環境が見られる。また、平野部では農業が盛んで、世界農業遺産にも選定されている。佐渡金銀山が重要な地質遺産であるが、ここを軸とした世界遺産への登録も目指している状況。2017年の審査で条件付き再認定となっている。評価としては再認定。主な評価点として、前回の審査で9点の指摘事項があったが、ほぼ対応されており、それぞれ一定の改善がされていた。協議会内で4つの部会があるが、活動が活性化しており、それぞれのステークホルダーがジオパークの意義、意識付けが良くできており、連携が図られていた。また、新しいサイトの開発に向けて、地元の関係者との丁寧な折衝を続けていた。事務局に研究員が補充されており、ジオパークの活動として様々な課題を解決していきながら、地域の方々と運営していく体制が整ってきた。質の高いジオガイドも育ってきていた。一方で改善を求める点として、サイトの整理と再設定が10ある地区のうち4地区しか進んでいない。研究員が補充されたが、地質の研究員に偏っているため、ジオパークの分野を広げるための専門家との連携が必要。ジオツーリズムは地域の観光関連の企業が熱心に展開されているが、可視化については、佐渡の両津港周辺に偏っており、島全域として看板やサインの整備が必要。また、新しくできた拠点施設があるが、市の施設であり土日休みであり、港から分かりにくい場所にある。観光客のニーズや実態に即した整備が必要。世界文化遺産登録、世界農業遺産とジオパーク活動が相乗効果を生み出すような連携が必要ではないか。鉱物の販売に関しては、赤玉石などの保護保全に向けた積極的な活動を続けてほしい。以上のことから、再認定という提案をさせていただく。

委員長：意見、質問等ないか。他のプログラムとの相乗効果は上がってはいるが、より積極的に行う必要があるということか。

部会長：この2年間でジオパークとして整備が進んできているので、他のプログラムとの連携も充実させていく必要があるのではと考え、期待を込めて指摘させていただいた。

委員：佐渡は国定公園になっている。2010年に環境省が全国の国立・国定公園を総点検した際に、佐渡は自然環境の面で評価が高く、積極的に国定公園を拡張していくべき地域の一つという位置づけ。そういった取り組みを進めていくなかで、現在行っているサイトの再整理と国定公園の保護保全強化との活動がリンクして双方がより前進できるような仕組みにできれば良い。

委員：佐渡は日本海側の地震が活発な地域。ジオパークの中で地殻変動の様子などの地形的な面白さを伝えつつ、防災教育に繋げる活動がありそうだが、やっている人はいるか。

部会長：今回の審査では防災の部分はあまり聞いていない。

委員：ジオパークを通した防災教育により意識を高めて、一方で面白い地形を楽しんでもらえるような仕組みがあれば良い。

部会長：今年から小学校で防災の授業を実施している。特に雪が降る地域での地震や津波を意識した形で取り上げており、それが地形と関連していることを子ども達に説明している。今年度、地方気象台や市防災部局と連携した防災学習も予定していたが、日本海側で大きな地震があった影響で実施できなかったと聞いている。今後、各関係者と連携して実施していくものと思う。

委員：指摘しなくても実施してくれそうか。JGCとして後押しができるのであれば、指摘しても良いのでは。

オブザーバー：佐渡近辺の地殻変動や地震活動の影響が地域防災にどのような影響があるかは、既に佐渡の防災学習で実施されている。

委員長：それでは、佐渡は再認定でよろしいか。

各委員：異議なし。

<議題①-4 再認定審査地域 JGC 調査運営部会報告・審査【恐竜渓谷ふくい勝山】>

部会長：恐竜が生きてきた大陸の時代から現在までのダイナミックな大地の記憶・変動を見ることができる地域。恐竜関係では、福井県立恐竜博物館と連携しながら、かつやまこども恐竜ラボ、博物館の視察・見学なども盛んに行っている。今回の提案としては再認定。今回の4年間の間に地域資源の掘り起こしや文化を尊重したまちづくりが展開されている。また、地域のコミュニティの方々がジオパークに関わっている。その中でも特に女性の団体が積極的に関わっている。この方々は恐竜だけではなく、農業関係者や飲食店関係者なども積極的に活動している。この4年間でジオパークがさらに地域に理解されてきた。今後の課題としては、サイトのモニタリングや保全の仕組みが十分に構築されていない。恐竜化石の産出露頭では草木が繁茂していて地層を見ることが難しくなっているとの指摘もある。ジオパークのパンフレットが恐竜と地質を中心とした構成となっており、恐竜以外のサイトや拠点施設の説明が簡単な説明に留まっているため、全体の魅力を伝えられるような工夫をしてほしい。福井県立恐竜博物館では関連施設として勝山の恐竜の森、ジオターミナルを中心的な拠点にしているが、勝山の地域性を伝えられるようなジオパークづくりをしてほしい。より良いジオパークになるための提案としては、恐竜という大きなコンテンツで地域ブランドを構築しているが、勝山が持つ地域性を十分に開拓してほしい。

委員長：恐竜渓谷ふくい勝山は2013年に初めて条件付き再認定が出た地域。2015年に前回の指摘事項を改善して再認定となり、今回の再審査を迎えた。意見、質問等ないか。

委員：恐竜博物館はすごいコンテンツ。それに埋もれて勝山がジオパークとしてやっていけるか心配に思っていたが、前回の指摘にあったエコミュージアムとの連携が進んでおり、ジオパークとの融合がされていた。スタッフも活発に活動しており、ジオパーク活動の厚みが出てきた印象。恐竜博物館に訪れた人をジオターミナル等、勝山市の別の場所に連れて行く流れもできていた印象。ジオパークとしてボトムアップ事業が芽生えている良い事例と感じた。女性も活発で、学校教育も進んでいる。希望としては、他のジオパークに影響を与えられるような活動を行っていただきたい。県の事業である恐竜博物館になかなか口を出せない印象を持った。協議会のメンバーなので様々連携はしているが、例えば保全の面だと、恐竜渓谷の露頭について、発掘している場所は問題ないが、上側の新しい地層には草木が生え始めている。重要な発掘現場をガイドが案内するシステムはできているので、できればきれいにを見せてほしい。

委員長：露頭の話は、天然記念物に指定されているかと思うが。

オブザーバー：福井県は除草の整備に年間400万円程かけており、年2~3回除草を行っている。

委員：勝山市は、白山市を含めた7市町村をエリアとする白山ユネスコエコパークの一員でもあるが、エコパークや隣接する白山手取川ジオパークとの連携は図られているか。

委員：現地審査の際に白山手取川の職員が来ていた。平泉寺という白山信仰の拠点はあるが、信仰ルートの発掘や観光としての活用はまだこれから。白山手取川を絡めた周遊ルートがあれば面白いものができるのではと感じた。

委員長：エコパークに関しては、白山手取川と連携して取り組んでいる。世界を目指すとは宣言していないのか。

委員：聞いていない。

委員：去年訪問した際の印象だが、恐竜の存在感が圧倒的。岩屑雪崩や河岸段丘もあるが、存在感が薄い。九頭竜川が生かせないかと個人的には思う。

委員長：真ん中に九頭竜川が流れているが、活用したジオツアー等は聞かない。

委員：豊富な水資源を活用して電気を発電している等産業が活発。展示館が拠点施設となっている。かつてすごい洪水があり九頭竜にダムを作った。そういった歴史もあって、段丘もある。まち歩きに活用している部分もあるが、説明部分は弱い。

委員長：再認定でよろしいか。

各委員：異議なし。

<議題①-5 再認定審査地域 JGC 調査運営部会報告・審査【磐梯山】>

副部会長：磐梯山の見どころは、1888年に起きた水蒸気噴火に伴う山体崩壊とそれが作る地形。さらに磐梯山は何度も崩れており、猪苗代湖は約4万年前に起きた山体崩壊が川を堰き止めてできた。五色沼は1888年の山体崩壊が作った堰止め湖であり、現在は観光地として有名。地域住民の活動として、山の形を模したジオパークカレーが開発された。ご飯の部分が崩壊地形を表した山の形になっており、具材のブロッコリーや茄子が、山崩れが作る流れ山と呼ばれる小高い丘をイメージしている。ご飯の型を協議会事務局が作って、具材は各店舗が独自に考えて、ジオパークの普及に取り組んでいる。評価としては条件付き再認定とした。判断根拠だが、一点目は事務局体制の強化。過去の指摘事項の早急に解決すべき課題に事務局体制の強化があり、そこで対応したのが事務局支援員という週1日勤務する方を4人雇用したものであったが、この雇用形態ではジオパーク活動の中でどれだけ協力、貢献できるか見通すことができない。もう一点、拠点の明確化が前回指摘事項にあったが、観光客目線でジオパークに訪れた時に、始めにどこに行けば良いか分からないという点が最初から繰り返して指摘されているが、整備が進んでいない。認定時には裏磐梯ビジターセンターなど小さな拠点が複数あり、それらを繋げて発信すれば良いのではという提案もしているが、なかなか進んでいない。それができていないのは、基本計画やサイトの保全計画などが不安定であるのが要因。磐梯山は3町村が運営しているが、温度差が大きい。取り組みを一つにまとめるためには基本計画やアクションプランが必要である。また、サイトの保全計画も明確になっていないので、2年間で早急に体制を整えた方が良いとの判断に至った。

委員長：意見、質問等ないか。前回の審査は私が行ったが、その時の指摘事項が対応されていないという点が大きい。国立公園内では保全計画があり、モニタリングされているが、国立公園外にはないという点も前回指摘した。そういった点が改善されていないことが大きな要因だと認識している。

委員：保全計画をいかに実効性のあるものにしていくかがポイント。3つの町村がしっかり関わって国立公園外を含めた計画策定を。

副部会長：国立公園外であっても市町村の文化財や天然記念物等に指定されているものは各自治体が主体的に保全していると思うが、それらに該当しないものについては、ガイドやジオパークに関わる人達が自主的な形で守っていくよう位置づけるプランが必要。

委員：事務局支援員は週1日勤務とのことだが、他の日はどうやって生活しているのか。

事務局：不明だが、元々ジオパークの活動に何らかの形で関わっている方が事務局支援員となっている。

委員：基本計画、保全計画は今年度の計画もないのか。

事務局：現地審査員からは不十分な計画だと聞いている。

委員：3町村の合意形成が難しい印象。しっかりとした推進体制、事務局体制が弱いということか。

副部会長：報告書を読む限りはそう受け取れる。専門員が1人で頑張っている印象。

事務局：現地審査で各首長との面会があり、1人首長が変わっていた。積極的な発言を聞いてこられたとのこと。今後は変わるチャンスとも捉えられている。

委員長：事務局体制が現状では不十分である。以前は専任1人と兼任がいて、現在も基本的には同じで事務局支援員が増えたのみ。副部会長の説明にあったとおり、運営体制、理念の理解、指摘事項への対応が不十分であるとのことで、条件付き再認定でよろしいか。

各委員：異議なし。

<議題①-6 再認定審査地域 JGC 調査運営部会報告・審査【白山手取川】>

副部会長：白山手取川の見どころは、白山という2,700メートル級の火山から流れ下ってくる手取川が急峻な

地形を作り、それが広大な扇状地を作っていくというプロセスが分かるところ。さらにその途中には世界的な価値を持つ桑島化石壁という化石産地があり、生物の進化や当時の環境等が分かるという見どころを有している。調査運営部会の評価としては再認定となった。根拠としては様々な大学、研究者との連携が多い地域であること。さらには認定後、各施設や地域団体との連携強化が図られている。有償ガイドツアーも常時受入可能となっており、観光客が楽しめる仕組みができてきた。また、将来的にはユネスコ世界ジオパークの認定を目指して積極的に活動しているので、国際会議や JGC が行っている国際協力活動等にも積極的に取り組んでいる。課題としては、白山市はジオパークだけでなく、ユネスコエコパークや SDGs 未来都市に認定されている自治体であり、それぞれの取り組みの役割を明確にして地域開発に繋げてほしい。また、拠点施設はあるが、世界ジオパークの拠点としてはより工夫が必要なので再整備してほしい。さらに、白山市では食のブランド化に取り組んでいるが、そこにジオパークのエッセンスを加えてブランド力の向上を図ってはどうかとの指摘が挙がった。

委員：現地審査してきたが、4年間で色々と進んだ。運営体制も世界ジオパークを目指しているということでスタッフも充実している。日本ジオパークとしては問題ないと感じた。

委員長：世界を目指す上で付け加えることなどあればお願いしたい。昔は水の旅と言っていたが、世界的な価値としては、桑島化石壁を出しているのか。

委員：桑島化石壁はここ数年で色々な研究成果が出ていて、また昨年国際シンポジウムを開催して国際的にどういいう価値があるかを整理している。

委員長：恐竜溪谷ふくい勝山とはどう差別化するのか。

委員：白山市長が勝山市長へ訪問し、一緒に取り組まないかと打診した。勝山市長は将来的には一緒に世界ジオパークを目指すのも良いが、まだその段階ではないとのコメントだった。おそらく世界へ申請して現地審査が入ったら、なぜ隣の日本ジオパークと一緒にやらないのかとの指摘が必ずあるので、将来どうするのかを勝山市から聞いて答えられるようにする必要はある。

委員長：古生物学的に違いはあるのか。

委員：基本的に同じ地層を掘っているが、勝山からは大きな恐竜が出るので小さな化石を熱心に探していない。白山は大型な化石が出ないので、小型の哺乳類や爬虫類を探して論文を書いている。

オブザーバー：大きな露頭は三つ。手取層は広がっているのですが、勝山と白山だけだと手取層全体がフォローできていない。岐阜県側まで広がっているのですが、世界を目指す上では指摘があるのでは。

委員：おっしゃるとおりだが、全部をジオパークにする必要はない。

委員：元々河川をメインとしていたが、捨てがたい魅力がある。激しい侵食や土石流の出るサイト、中流域の溪谷、ダムがあって、扇状地がある。それだけを見せるのは面白いが、うまく活用、説明できていないのか。

委員：ガイドはそういう話しが好きで、現場ではテーマはうまく使われている。

委員長：有効に使われているが、国際的価値はどうか考えると、類似のものは他地域にもある。そういったこともあり二本立てで価値立てすることとしている。なくなった訳ではない。

委員：扇状地も白山市に入っているのか。段丘はどうか。

委員長：扇状地は、全部は入っていない。段丘も自治体が違う。

委員：恐竜というと、世界にはもっとすごい地域がある。

委員：恐竜ではなく、小型爬虫類と恐竜の時代の植物及び哺乳類を含めた白亜紀の生態系。

委員長：世界遺産と違って世界一ユニークでなくて良い。その国で最たるものという認識なので問題ない。

委員：勝山よりも多種多様な化石、生態系だということ。

委員長：再認定でよろしいか。

各委員：異議なし。

部会長：三陸は南北約 220km、面積約 6,000 km²を有し、16 市町村が参加する日本で一番大きなジオパーク。南部は約 5 億年前の基盤岩類と堆積した地層となっており、北部は 2 億年前以降の付加体の地質で特徴付けられている。様々な鉱物資源にも恵まれている。北部は海岸段丘、南部はリアス式海岸が発達しており、それに応じた人々の生業が広がっている。特にリアス式海岸は天然の良港となって漁業も盛ん。2011 年の東日本大震災では津波による大きな被害を受けた。認定にあたっては JGC が復興支援の意図もあることと、JGN も支援をしながら、ジオパークの改善、継続に取り組んできた。2013 年に新規認定され、2017 年に条件付き再認定になり、今回の再認定審査となっている。前回までの指摘事項で一番大きな点は、三陸がトップダウンでスタートしたこともあり、岩手県が管理運営を行っているが、事務局が盛岡市と宮古市の二カ所あり、距離的にも離れているため意思疎通が難しい点。また、16 市町村でジオパークへの温度差があったり、全員で共有ができない点がジオパーク活動を続ける中で大きくなっていった。今回の再認定審査では、特に運営面で改善が認められたとの報告がある。特に宮古市でのジオパーク支援組織を強化するとともに、エリアを北部、中部、南部に分け、市町村単位の地域協議会を作って地域からボトムアップを図る活動にシフトしてきている。ブロックごとのガイド研修の実施や、全体で全国大会に参加するなど積極的な活動が進められている。震災復興にあたって沿岸部では環境省のみちのく潮風トレイルや、国交省の災害伝承ネットワーク等、様々な枠組ができており、これらの枠組と一緒にジオパークを進めてきている。2 年間で良い方向に動いているが、地質以外の部分、地形地質と生業との関わりがうまく説明できていない。地理学・地学の専門員の雇用が必要である。運営体制はブロック別となり、また市町村もそれぞれジオパークの計画を作りながら進めているが、まだバラバラになっている感じが否めない。全体を統括して三陸ジオパークの特徴を伝えられる整備を進めるべき。琥珀、ばら輝石等の化石、鉱物販売に関しても、保全や持続可能性の観点から踏み込んで考えてほしい。また、津波災害から復興で得た経験を国内外に発信してほしい。この 2 年間では運営体制を変えながら、ボトムアップでジオパークづくりを進めているため、今回の提案としては再認定としたい。

委員長：現地審査に行った。最初の認定にあたっては JGC、JGN が全面的に支援するという形で少し甘くした経緯がある。そこで 4 年後運営がうまくいっていない部分があり条件付き再認定となった。特に運営体制に関して、これだけ広い地域の 16 市町村をうまくまとめきられていないという指摘事項だった。加えてジオパークの理念の理解もバラバラだった。JGN からの具体的な支援として、三陸のコーディネーターは JGN 事務局次長が 4~5 年派遣されている。この 2 年間でブロック制を取り、市町村がそれを支援する体制を取った。まずブロックごとに意見を抽出し、各ブロックの意見を上げる形を取った。これがうまく機能している。県知事と市町村長の全員に面談したが、それぞれの総合計画の中にジオパークを明記していた。県の総合計画には世界ジオパークを目指すことを記述している。このように体制が整ってきており、一部問題はあがるが、指摘事項にはほぼ応えているため、再認定という判断に至った。

委員：最初は岩手県内だったが、八戸市、階上町、気仙沼市を足して三陸ジオパークとして展開してきた。審査報告書から県の関わりを見ると、岩手県は中心で関わっていて、青森県は少し、宮城県は出てきていない。3 県にまたがっているが、世界に出る時は青森県、宮城県ももっと関わってくると良い。

委員長：県レベルでは青森県、宮城県の協力は無い。気仙沼市と八戸市の市長は積極的に参加している。ただ八戸市は大きい自治体。これからの運営をどうやっていくかが課題になる。

部会長：宮城県に住んでいるが、県としてのジオパークに関する認知が低い。気仙沼市が入っているから盛り立てていこうという部分はない。青森県と宮城県も組み込む形で取り組んでほしい。

委員：復興国立公園も青森県、宮城県の 3 県に拡大している。うまく連携して取り組んでほしい。

部会長：観光面では、6 月に青森県から福島県まで 1,000km のみちのく潮風トレイルが全通したので、そこを軸にした連携がされている。宮城県も入っているので、ジオパークがうまく組み合わせると良い。

委員：2 年前の審査で条件付きとなり、フォローアップとして行かせてもらった。2 年前はまだ復興途中で、これからジオパークをやるという感じの自治体もあり温度差が大きかった。ガイドも地域間の行き来がな

く、お互いを知らない状態だった。その後合同でガイドの集まりや、行き来をするようになり、進歩してきた印象。岩手県を中心に青森県、宮城県を含めて震災の復興が終わるタイミング、新たな地域の発展ということで、総合計画の一つの柱にジオパークを組み込むのであれば、ジオパークが貢献できるという意味では良いのではと思う。その見本になってほしい。16自治体、3県で運営が非常に大変なので、JGCとしても様々な形で支援できればと思う。

委員長：今回の現地審査には山陰海岸の職員が加わった。山陰海岸も3県にまたがっているので意見交換していた。現地審査後に呼ばれて現地のフォーラムに参加することにもなっている。JGC、JGNともに支援し続けている結果がうまくいっていると思う。

委員長：再認定でよろしいか。

各委員：異議なし。

<議題①-8 再認定審査地域 JGC 調査運営部会報告・審査【男鹿半島・大潟】>

副部長：過去約7,000万年前、白亜紀末期にアジア付近で起きた火山活動に伴う岩石から、第四紀の比較的新しい時代に活動した活火山の地質が断片的だが全体として見られる地域。評価は条件付き再認定。根拠として、緊急に解決すべき課題に地質遺産の価値を理解するとあるが、男鹿半島・大潟が設定しているサイトのリストがきちんとしたものではない。サイトとは基本的には学術的価値を持ち、且つ地質学的側面、文化的側面、エコ的側面を持つものを保全するためにサイトとして設定し、それをリスト化していくことによってモニタリングしていくためのものだが、根拠が明確になっていないものをサイトに設定している。なぜ学術的オブザーバーがいるにも関わらず地域資源の価値が評価されないかという、管理運営体制が貧弱になってしまっているため。男鹿半島・大潟は3年前に第7回日本ジオパーク全国大会を開催し、男鹿市と大潟村の連携が強まっていたが、その後の活動が停滞してしまった感がある。現在の体制は男鹿市と大潟村それぞれに事務局があり、二つの事務局は定例会議を週1回開催し情報共有を行っているが、専任職員は1人もおらず、兼任職員のみ。その中でも1人のスタッフが実質的に活動を支えている状態になっている。専任職員がいないことにより、全国大会まで実施した時の経験が引き継がれていない。それが結果的に地域資源の価値付けやサイトの設定が、旧態依然のまま残っている状況になっている。ジオパークプログラムは変わってきており、地質サイト、エコサイト、文化サイトに分けていくことが明文化されているものだが、昔の状態で留まっているため早急に改善していただきたい。改善するためには専任職員を置いて、ジオパークに常に関わる人が必要であることから、2年間での条件付き再認定としたい。

委員：報告書にエリアで海を含めたとあるがどういった意味か。

副部長：岩礁に近い離れ小島をサイトに指定しているが、ユネスコ世界ジオパークのエリア設定では一筆書きのエリアである必要があり、飛び地は認められていない。男鹿半島・大潟は飛び地になっているため、国定公園の範囲を参考にしつつ、エリアの見直しをしてほしい。

委員長：サイトが現在のユネスコの定義に該当しないとのことについて、コメントしてほしい。

副部長：男鹿半島・大潟は指摘事項を受けてサイトを一度見直している。当時の各ジオパークにヒアリングを行い、それを元に再設定をしたのが2015年。しかし、サイト設定の方針が固まってきたのが2017年。その当時、男鹿半島・大潟では全国大会の開催があり、そういった情報が届く人はいたが、おそらく全国大会の準備で情報がきちんと伝わっていないまま残ってしまったのではないかと。

事務局：2015年にサイトの定義をジオサイト、エコサイト、カルチャーサイトと分類することが話題になり始めた。その話題を受けて、男鹿半島・大潟はいち早く各ジオパークにサイトのアンケート調査を実施したが、当時はまだ話題になり始めた時期であり、未整備のジオパークが多かった。そのアンケート結果を受けて判断してしまったようだ。

委員：全国大会を開催し、地元にも成果が残ってプラスになった。だが事務局体制が不十分となると、全国大会をどのような体制で開催したのか。

副会長：実行委員会を設立し、通常の協議会事務局とは別組織で大会運営を行う。全国大会終了後に解散するので、打ち上げ花火のように消えてしまうのが実情。

委員：継続的なジオパークの活動としては良くない例なのか。

副会長：全国大会をきっかけに業者やホテルがジオパーク活動に関わるようになったのはプラスな要素。そこは評価している。ただ、持続していくことが難しかったのが今回の結果ではないかと思う。

事務局：男鹿半島・大潟の全国大会からブロック単位で大会運営を行っていくこととなり、東北ブロック内での連携が進んだと思う。そこは評価できる点。ただ、事務局スタッフが全国大会終了後に全員異動してしまい、その後の体制にうまく引き継がれていない。

委員長：条件付き再認定でよろしいか。

各委員：異議なし。

<議題①-9 再認定審査地域 JGC 調査運営部会報告・審査【栗駒山麓】>

副会長：約 50 万年前から活動し始めた栗駒火山が不安定な地質構造を持っているので時々崩れる。その崩れた土砂が流れ下り、三陸ジオパークの一部でもある北上山地にぶつかって東北の内陸部に広大な平野を作った。その広大な平野は年間 10 万羽を超えるマガンが越冬する湿地や、人々の生活を支える田園地帯となっている。栗駒山麓がジオパーク活動を始めるきっかけとなったのは、2008 年 6 月 14 日に発生した岩手・宮城内陸地震に伴う荒砥沢地すべりという大きな地すべり。これを契機に防災教育や、地域を持続可能な形で発展させていくことを目的にスタートした。過去 4 年間での大きな進展はビジターセンターの開館。今年の 4 月に開館したが、7 か月間で来館者数が 2 万人を超えており、地域の人々の流れを変えている印象。再認定と評価した。根拠として、過去の審査の主な指摘事項をほぼ全て対応している。ただ、ジオサイトの定義と使用する呼称の整理、他機関との調整に関しては、一部の看板にジオスポットという言葉が残っている。ジオサイトの再整理は済んでいるため、直してもらえれば問題はない。評価できる点としては、荒砥沢地すべり冠頭部と呼ばれる林野庁が管理している場所があり、ここを栗原市と林野庁が連携して、入域に関するルールを策定した。そのルールに基づいてジオガイドが子どもや観光客、修学旅行生に防災教育を提供していく仕組みができ始めている。さらにビジターセンターやくりこま高原駅のインフォメーションセンターの拠点が整備され、訪れる人が増え、地域の交流が増えている。地元のコンビニエンスストア等の売上向上にもつながっている。荒砥沢地すべりに巻き込まれたが奇跡的に一命を取り止めた方が語り部として防災教育に関わっており、ジオパーク推進協議会が積極的に支援している。今後のツーリズムの発展上非常に大きなことである。また、三陸、ゆざわ、鳥海山・飛鳥といった東北ブロックのジオパークとの連携を積極的に行っており、複数のジオパークで連携したガイド養成講座、イベントへの相互参加など、JGN の活動の中でも模範的な活動を展開している。課題としては、地質学的な情報発信が弱い。ビジターセンターに地質図等の展示がない。荒砥沢地すべりに関しては、不安定な地質構造が大きな地すべりのきっかけになったとの説明はあるが、その特異な構造に特化した展示はない。なぜこのような地すべりが起きたのか、分かりやすい説明がほしい。また、前回の指摘事項に栗駒山麓のテーマとストーリー再検討があり、それへの対応として 4 つのエリアに分けたストーリーを構築したが、縦割りのような印象を受けるので、地域全体のストーリーの中での位置付けを明確にしてほしい。活動の視認性は拠点施設等で上がってきているので、さらに地域に広めることで、地域住民がジオパークの中で生活しているという機運が生まれ、更なる質の向上が認められると判断して、再認定という評価となった。

委員：荒砥沢地すべりの現状は。

副会長：林野庁がなるべく崩壊後の状況を残すため、安全上の最低限の工事を行っている。冠頭部は危険な場所なので、立ち入るための遊歩道の整備等を林野庁の許可を受け、栗原市が行っている。入域に関しては制約があり、入る目的が明確であれば栗原市職員やジオガイドの随行の基、見学ができるようになっている。

委員：ダムに流入している部分の状況は。

副会長：留まっているので、今のところ大きな問題にはなっていない。冠頭部から下のダム湖に土砂が流入している地形がよく見えるため、ジオガイドが説明に取り入れており、良い学習ができる場になっている。

委員：上級ガイドとはどのような仕組みか。

副会長：ジオパーク講座を行っており、その中でよりジオパーク活動に関わりたいという方に、ガイディングテクニックやさらに詳しい地質情報を教えて、中級ガイドとして認定している。上級ガイドは荒砥沢冠頭部に特化したガイドとして育てようとしている。具体的には安全管理の徹底や防災に関する知識を持っていること、防災に関する客観的な評価ができること等を条件に設定している。現在は栗原市の職員が随行しなければ冠頭部は立ち入ることができないが、将来的には上級ガイドが入れば案内できるようにする所まで栗原市は考えている。

委員：認定は協議会が行っているのか。

副会長：協議会が認定している。

委員長：ゆざわジオパークと一緒に世界を目指そうという動きはあるのか。

副会長：世界を目指す話しは聞くが、ゆざわと一緒に話している話はない。

委員長：再認定でよろしいか。

各委員：異議なし。

<記者発表資料確認>

※プレスリリース資料の文面を確認。

<議題②ユネスコ世界ジオパーク再認定審査結果グリーンカードの場合>

事務局：アポイ岳ユネスコ世界ジオパークの審査結果について、ユネスコ世界ジオパークカウンシルの議事録がまだ公開されていないので決定ではないが、議論の結果はグリーンカードだった。結果がグリーンカードの場合、前年のJGCの再審査では条件付き再認定としていたが、再認定と見なしてよろしいか確認願いたい。

委員長：そのようにしてよろしいか。

各委員：異議なし。

<議題③来年度のJGC運営について>

委員長：前回のJGCにおいて、現在の日本ジオパーク委員会と調査運営部会の二階建ての審査体制を一階建てとすることを提案し、賛同いただいたので体制案を示したい。現在は、日本ジオパーク委員会の中に調査運営部会があり、部会で評価・諮問をしており、部会での評価について日本ジオパーク委員会で審査を行っている。現在の体制だと、現地審査員がいない状況で審議しているので難しい部分もある。また、部会での評価がJGCで大幅に変更されたこともあり、今後のよりスムーズな審査体制を目指して前回提案した。体制案については委員長に一任されたが、ひとまず現在の調査運営部会員を日本ジオパーク委員会に当てはめてみたところ、全体で21名となった。21名では多いので、減らす方向で調整する。また、若い人と女性を優先する方針で調整する。調査運営部会は今後招集しないこととする。現在の部会員の一部を日本ジオパーク委員会に入れることになるが、今後、学会推薦や公募は行わない。JGCの外にコンソーシアムを設置し、そこに学会からの推薦者に参画いただき、学術面の評価をお願いしたいと考えている。今年のMine秋吉台の世界推薦審査でも、地質学会に学術的な面の評価を依頼していた。新体制で4月から2年間実施し、どのような体制がより良いか検討していきたい。今後の流れとしては、3月にメールで委員候補を挙げて、意見をいただく形にしたい。来年度5月の地球惑星連合大会において、世界推薦に申請する地域のプレゼンがある予定なので、その前に委員会を開催して新しい委員長・副委員長を決定したい。この形で進めてよろしいか。

部会長：学会推薦者の枠組が変更となるが、学会によっては既に来年度の候補者を立てている学会もあると思う。どのタイミングで通知するのか。

委員長：本日承認されれば、早々に通知を出したい。

委員：委員は何名程で考えているのか。

委員長：現在のメンバーを当てはめてみたところ 21 名となり、これでは多い。長く関わっていただいた方にはコンソーシアムに移行してもらいたいと考えている。選考方針として、若い方、女性を多くしたい。人選案は私が考える。特に問題がなければこの方向で進めたいと思うが、いかがか。

各委員：異議なし。

<その他>

■アポイ岳からの提案について

事務局：アポイ岳ユネスコ世界ジオパークから、今後のユネスコ世界ジオパーク地域の国内審査のあり方について提案があった。現在、ユネスコ世界ジオパーク地域はユネスコの審査員による世界審査の前年に JGC による国内審査を行っているが、この国内審査をなくしてはどうかとの提案。12 月 13 日に開催した調査運営部会でも報告したが、判断できる材料がそろっておらず、また、世界地域の事務局長会議を 1 月に開催する予定であることから、事務局長会議の際に他地域の意見についても集約する必要があるとの意見が挙がっていた。

委員長：この件に関して、委員会としての意見をまとめる必要がある。アポイ岳は、国内審査で条件付き再認定となり、その翌年に世界審査を行っているが、世界審査だけで良いのではないかという意見。

事務局：提案の理由として、主にコスト面を気にしていた。アポイ岳は世界審査の前年に JGC からアドバイスをもらえたことは良かったと評価している。その上で、コスト面と 4 年に二度の審査をしなければならないことについて、あり方を見直してみてもどうかとの提案に至っている。

委員長：日本ジオパーク委員会は日本のユネスコ世界ジオパークの品質、世界との連携を保証する組織であると思っているので、現在の仕組みは簡単に変更できるものではないと考えている。ただ、アドバイスミッションの形は不可能ではないと思うが、効力がないので現在の仕組みの方が反応しやすいのではと思う。

委員：自立するのは良いが、質が下がるのであれば口を出さなければならない。

委員：日本ジオパークが 44 地域あり、内 9 地域がユネスコ世界ジオパーク。日本から世界という構造であり、世界の審査だけで日本ジオパーク委員会が知らないということは良くない関係。現地審査の対応が大変ということであれば工夫があっても良いと思うが、日本ジオパーク委員会が知らないという形にはいけない。

委員：世界へ申請する際は、日本ジオパーク委員会が品質保証した上で世界に申請するプロセス。再認定において日本ジオパーク委員会がクオリティを保証する必要はないのか。日本ジオパーク委員会が条件付き再認定としたことは、ユネスコへは伝わっているのか。

委員長：伝わっている。

委員：日本ジオパーク委員会が指摘した点を見てほしいという形になっており、その上で世界の審査基準としては問題ない、あるいは改善されているとの判断だったと認識している。一方で、自分達は日本ジオパーク委員会のサポートが必要ない程しっかりしているので問題ないと地域が言うのであれば、それはそれで力強いと思う。落ちるとしても自分達の責任ということであれば。

委員長：国内にジオパークを持っている日本や中国は特殊。他国は直接世界の審査を行っている。本来、ジオパーク委員会は国内で責任を持ってクオリティコントロールをしている。ユネスコ世界ジオパークのアドバイスミッションと名前を変えてしまうのも手かもしれない。

事務局：1 月 UGGp9 地域の事務局長会議があるので、他地域の意見も聞いていきたい。

■日本ユネスコ国内委員会より報告

日本ユネスコ国内委員会事務局：9月の総会において、日本におけるユネスコ活動の活性化について審議を行い、国内のユネスコ関係者に向けて建議を出した。国内委員会の会長から関係省庁に向けても配付している。趣旨としては、全国のユネスコ活動に若い人の参加が少なくなっているが、日本の中で国際社会、SDGsにつながるような活動をされている地域の方々が多くいるので、ユネスコ関連事業に興味を持っていただきながら、連携して取り組んでいこうというもの。

委員長：JGCとしてもこの建議に沿う形で取り組んでほしいということか。

日本ユネスコ国内委員会事務局：建議を意識していただきたいと思うが、方針としてはこれまで議論されていることと大きな違いはない。建議事項の3番はユネスコらしい内容なので意識していただきたい。4番、5番はユネスコの登録制度に関連してくる。

■審査について

委員：今回の再審査では、9件中4件が条件付き再認定となった。認定・再認定基準をもっと明確に示していただきたい。例えば、どの地域もジオパーク推進のため協議会を設置しているが、今回の審査でも事務局体制への指摘があった。事務局の人数がどの程度なら問題がないのか、地質の専門員の設置の有無などももう少し分かりやすくしていただきたい。難しい話だとは思いますが、申請側からすると活動に対する評価基準があれば良い。

委員長：ユネスコ世界ジオパークでも同じことが議論されている。監査報告でその点が指摘された。完全に明記できない部分はあるが、基準を分かりやすく文章化できれば良い。来年度のJGCで検討したい。例えばドイツのジオパーク委員会だとクライテリアを細かく記載している。申請する地域の範囲や事務局、専門員の人数等について明瞭に記載している。日本では、必ずしもそこまでの記載はできないと思うが、認定基準がこれに基づいているというものを示せれば良い。これまではお互いに話し合っただけで納得していたところだが、それでは新しい人達が理解して付いて来ない。新しいジオパークを増やす意味でも、基準が曖昧のままではなく、ある程度明確に示せるよう作っていきたい。

委員：事務局人数等は地域の規模にもよるので一概には言えないが、例外は置いておき、一般的なケースでの目安はいるかと思う。

部会長：現地審査に行くと、時間を一番割いているのが自己評価表を使って活動をモニターしていくこと。ツアーリズムや環境保全等、ジオパークに関する様々な評価項目があり、確認には時間を要するが、重要なことだと思っている。理想としては自己評価表の項目を十分に実現することが望ましいが、実際には百点満点という訳にはいかない。確認していると、対応されていない項目が見えてくる。この部分に力を入れなければと認識する機会になっている。基準を明確化していくのであれば、自己評価表も参考にする必要があるのではないか。

委員長：自己評価表でも判断に迷う部分はある。基準を明確にできるものは明確にしていくべき。

副委員長：エコパークもジオパーク同様、人の暮らしにつなげて説明している部分がある。重複している部分はエコパークに任せる、あるいは一緒に取り組む等ができないのか、その部分が分かりにくい。地域によって事情が違うということはよく分かるが。

委員長：日本のジオパークの弱点は役割分担をあまりうまくできていない。

副委員長：日本ジオパークと世界ジオパークの関係も、もっと明確にできればと思う。世界遺産は暫定リストがあり、そこから世界遺産を目指すのでヒエラルキーができていく。登録までは大変だが明確。文化遺産についてだが、自然遺産はシステムが違うので。

委員：三島村・鬼界カルデラと三陸など、規模が違う地域が同じとなると難しいところはある。人口、面積、自治体数など、数値を出すことができるのか。

委員長：定款に記載してあるが、持続的に発展可能なサイズとなっている。数値的な定義ではない。

委員：地域ごとのデータを出せば比較できるのではないか。

事務局：ユネスコ世界ジオパークのカウンシルでチェックリストというものを検討している。その中では、必ず満たしていなければ申請すること自体が無理ではないかという項目が明示化される方向。これが公開されれば、例えば地球科学専門のスタッフが少なくとも常時1人は事務局に必要等が明確になる。

委員：チェックリストの作成は最近動いていない。来年から使用できるかは不透明。

委員長：監査報告では、素晴らしい取組だと記載されていた。

委員：審査を経験して思うのは、良いジオパークになるには人材確保が必要。悪いパターンはジオパーク認定後に事務局員が一斉に異動になること。首長に会う時は、様々なところでコミュニケーションを取れる良い人材を確保してほしいと伝えている。専門員に関しても、優秀な人材を良い待遇で雇用してほしいと。ただ、指摘事項へ具体的に記載することは難しい。期待するしかなかった。結果としてうまくいかない地域は、人材の確保ができていないところがほとんど。委員会で議論していく必要がある。一定の基準がないと準備のしようがない。人材の確保をどう具体的に記載するかは重要。ジオパークをやろうとしている地域はジオパークを基軸に考えている。勝山市は総合計画の中でジオパークについて明記し、具体的なアクションプランを作ることを決心。相応の人材配置をしている。

委員：あくまでも目安であり、細かいことで縛ってジオパークに入りたいというやる気を削ぐものにはしたくない。ある程度の目安があれば、協議会で議論できるのではないか。

委員長：最初に副部会長が説明した、3つの重要なポイントを満たしていない場合は条件付再認定というものは分かりやすい。それに類した指標になるデータ一覧を示せば良い。来年度のJGCで取り組みたい。

■今後の予定

事務局：1月31日に審査基準検討会議を開催。時間は10時から16時30分まで。10月に糸魚川で実施予定であったJGC研修会は2月8日、9日にかけて開催する。来年度については、JGCとしてユネスコ世界ジオパークで定められているガイドライン等も含めて、基本的な理念をどう共有していくかを考えていきたい。JGC主催の研修会を、5月23日に幕張で開催される公開プレゼンの前日に開催できないか検討中。参加対象者については、現地審査員にすべきか、もっと広くジオパークに取り組んでいる方にすべきか詰め切れていない。来年度事業に関してご意見をいただけないか。

委員長：JGC主催研修会の対象者を広くすると人数が多くなりすぎるのではないか。絞ったほうが良い。

委員：今回現地審査員だった人に対して、もう少し現場を見てほしかったという思いもある。現地審査などの着眼点を整理する場として活用するのはどうか。同じようなところに目を光らせるための情報共有が必要ではないか。

委員長：1月31日の審査基準検討会議、2月8～9日のJGC研修で詰めていきたい。

事務局：来年度JGCとして行うべき事業があれば、ご意見をいただきたい。議論する場が必要ということは理解した。今年度は現地審査へのオブザーバー参加を呼びかけたところ、数名の参加があった。また、今年度初めての試みとして開催する委員、部会員を対象としたフィールドでの研修会については、来年度も開催できればと思っているが、ご意見があればお願いしたい。

委員長：部会員がいなくなる可能性があるので、委員を対象とした研修等を多く開催すれば、全て参加は難しくともこの回は参加できる等となるのではないか。

部会長：現地審査に行く度に思うのが、審査の始めに協議会メンバーが集まる機会を設けてあるが、その際にもそもそも現地審査では何をするのか、どういう審査員が来ているのか等、導入のツールが必要ではないか。協議会事務局はどういう審査員が来ているか分かると思うが、ガイドや観光関係の方などが一堂に会した時に、この審査員は誰で何をするのか分からず戸惑っている例が見受けられる。最近は資料を作成し、前振りとして説明しているが、共有のフォーマットで作成し、全ての現地審査で説明する必要があるのではないか。

事務局：現地によっては情報を収集した上で、地域内で共有している場合が多いと思っていたが、最近は少ないのかもしれない。世界の審査では、どういう審査員が来るのか情報が少なければ本人へ直接質問する場合もある。そういった審査の前段階でのやり取りや、地域内で情報共有ができていないか否かでどういう状況か分かる場合もある。

委員長：説明のマニュアルを作成するようにしたい。その他質問、意見等ないか。なければ JGN の報告を。

事務局：JGN の国際連携ワーキンググループにおいて、東南アジア地域のジオパークがない国にジオパークを増やしていくことを目指し支援してきた。これまでは全国大会に招聘して日本の取組を見てもらっていた。タイを東南アジア地域のハブとするため、3年続けてタイでワークショップを実施している。サトゥーン地域でも実施したことをきっかけに、サトゥーンがユネスコ世界ジオパークに認定された。コーラートジオパークという国内ジオパークもできており、世界申請につながってきた。今年もタイでワークショップを開催し、タイ、日本を含めて6ヶ国が参加した。来年9月にはタイ国内で全国大会を開催しようとする動きもある。ジオパーク活動が急速に広まっており、JGN としてネットワークへの貢献している部分である。この取組は GGN のニコラス・ゾウロス会長も評価している。

委員長：その他質疑等ないか。

各委員：質疑等なし。

委員長：本日はありがとうございました。

以上